

## 軍隊経験が私の宝

東京都 藤澤 直一

私は大正十二（一九二三）年二月二十四日、東京府荏原郡若林町（現在の世田谷区若林町）で生まれました。今は都会ですが、当時は畑作を主とした農村でした。出征時の家族は大日本測量社社長の父、家事育児を担う母、弟二人、妹二人の、今で言えば七人の大家族でしたが、父は病弱でしたので、私は勉学の傍ら父の補助を努めました。

私の学歴は、昭和十（一九三五）年三月、牛込区立市ヶ谷尋常小学校卒業、昭和十五年三月、早稲田大学付属工手学校土木科卒業、昭和十七年九月、早稲田大学付属早稲田高等工学校土木科に在学中に繰り上げ卒業となり、昭和十八年四月、専修大学に入学したものの学徒出陣により徴兵検査を受けました。乙種合格となり、十二月から私の軍隊生活が始まりました。

兵曹を拝命、同月三十日、神戸港出航、上海に上陸、上海海軍特別陸戦隊江南砲艇隊に編入されました。

ここでは軍の糧秣輸送の警備で、砲艇はダイハツ製の船五隻で任務に当りました。艇長、機関長は軍隊のことを知り尽くした経験十年以上の下士官で、兵器は旧式の物ばかりで、内地で教育受けた兵器は新式でしたので驚きました。このことを上官に話しますと「新兵には分からないだろうが、これで勝ってきたんだ。何言っているんだ」と、怒られる始末です。

十一月一日、同隊の蘇州派遣隊に編入されました。隊員は七人で支那国民兵十五人に對しての軍事教育隊で、年齢は十五歳以上で、日本語も日常語は通じ、建物は大きく広いが教育は主に外で行っていました。

ある時、十六歳の兵に「軍人と乞食を比較して、どちらが偉いか」と質問したら「乞食が偉い」との答が返ってきたので、「なぜか」と聞きますと、

横須賀海兵团武山兵团に入団し、初年兵教育のため横須賀海兵团横須賀砲術学校一般教育班に編入されました。私的制裁については入隊前から軍隊生活経験者からよく聞かされていましたが、殴る蹴るはまだよいほうで、衣服の洗濯が悪い（ちよつとしたシミ程度なのに）とのことで、十二月の寒い季節、素足でコンクリートの床を駆け足で行き、薄氷の張っている大きなコンクリート水槽にズボンで膝までまくり上げて入り、汚れが落ちにくいので長時間かかり洗濯させられた時の、その寒さ、冷たさは今でも忘れません。でも耐えれば何でも出来ることを教わりました。

昭和十九年四月三十日、千葉県館山海軍砲術学校で陸戦の専門教育を受けました。五月一日、幹部候補生志願を上司から薦められたが、将校になると長期間除隊出来ないことを聞かされていたので、私は長男でしかも父は病弱であり、一日も早く除隊せねばと下士官候補にしていただけ、同日水兵長拝命。九月十五日、同校卒業して二等

「乞食は自分で食糧を探して生きている、兵隊は食べさせてもらって生きている」との返事でした。皆様はこの返事について、どのように考えますか？

数日たつて多くの広島船舶隊「曙部隊」が入って来ましたので、私が兵器管理の任に当り、銃弾を紛失した兵に都合してやり、営倉を免れ感謝されたことを思い出します。

昭和二十年七月中旬頃、日本が負けたとの情報を耳にしましたので、内地との文通が出来ましたので聞きますと、我が家は空襲で焼失、沖繩は大変だとの便りでした。それで半信半疑の毎日を送っておりました。もしこれが事実とすると、いつ、八路軍の襲撃があるか心配でしたが、国民軍の諸君から「今まで教わった腕を見せてやる」とかえって元氣付けられての毎日でした。

八月十五日、不幸にもうわさどおり終戦の報せにより、支那軍に兵器を没収され、本隊の江南に帰隊しました。そしてこれまで中国の住民に対し

て親切に面倒みていたので、日本に帰らずに、今まで通り指導を望まれたのですが、私はどうしても帰還しなければならない家庭的事情があるということで、惜しまれながら上海に向い抑留生活に入りました。

いつまでここで生活しなければならぬのか、不安の毎日でした。建物が狭く、土で支那式の居住用の建物や倉庫を建築しました。建築に当っては大工、左官、土工の経験者が大勢おるので難なく完成することができました。

また野菜不足で便秘をする者が多く出ましたので、中国政府と交渉して配給受け、また早く成長する葉野菜を栽培して健康に注意しました。

私達の隊は変電所に竹とロープを使い四人一段のベットの三段造り、食糧(米)は三年分位倉庫に保管してあり、また衣服も一人三着を持つことを許されておりましたので、何ら不自由なく、特に中国政府、地区の住民からもよくしていただいていたの幸せな毎日でした。戦争した国での生活とは

全く考えられませんでした。

昭和二十一年四月二十五日、帰還を許され、上海港出航、舞鶴に上陸しましたが、出発前の長雨のせいか軽い脚気を患い、舞鶴の病院に入院することになりました。東京は食糧事情が悪いと聞いていましたので、無理して退院しても再発のおそれがあるとの医師の診断もありましたので、完治するまでお世話になることにしました。ようやく六月になり体の調子が良くなり、そろそろ退院しようと思っていたところ、満州コロ島より第一回邦人引揚者が舞鶴に上陸しましたので病院から抜け出し迎えに出ました。

そこで吃驚しました。私達は待ちきれないほどの荷物でしたが、満州コロ島よりの引揚者達は空手で、女性は坊主頭で男装した方がほとんどでした。気の毒でしたのは六人の老人がホオーツとしたのか、あるいは持病を無理しての帰還だったのか分かりませんが、上陸と同時に倒れ、亡くなられました。私も納棺を手伝いましたが本当に可哀

想でした。

また泣き崩れる女性から理由を聞きますと、ソビエト軍からの強姦を逃げられるため、天井に登った途端赤ん坊が泣きだしたので、ソビエト軍に発見され軍人との三人の重みで天井が破れ、三人共床に落ち、赤ん坊が亡くなったとのことでした。

私は引揚者が落ち着くまでお手伝いをして、六月二十日に家族の待つ世田谷区下馬の親戚の近くの借家に着きました。家族全員無事で私を迎えてくれました。

同級生で海軍航空隊へ入隊した者は特攻隊で全員戦死しておりました。私の家は空襲で全焼し、巢鴨に住居を構えたようでしたが、それも強制疎開となったのですが、両親とも東京生まれで疎開する先もないので、女中に来ておられた方のお世話で、福島県矢吹に疎開することにしたとのことです。しかしある程度の荷物をまとめて就寝したものの、まもなく空襲に遭い、疲れのため熟睡して枕元に火が来て、その熱さで目を覚ました、そ

して位牌と過去帳だけ持って逃げ、命拾いしたとのことでした。

食糧については、京王線仙川駅近くに五反歩程の土地があったので、父は東京農大で学んだ知識を活用、病弱ながら自転車で一時間程かかる所に別居中の弟と妹に助けられ陸稲、麦、さつまいも、野菜等栽培していたので不自由は無かったそうです。

私も父の測量の仕事を手伝い細々と生活していましたが、そのうちに財産税として物納された土地、家屋の測量などの仕事も多くなりましたので、本格的に営業開始しました。軍隊で鍛えた体力、やれば何でも出来る気力、中国人に対して親切にして感謝された人間関係を常に目に浮かべ、寝食を忘れ努力しました。仕事も日増しに増え、畑地を売却して住居、社屋を建て、電話も必要になり、「株式会社大日本測量社」を設立し法人として登録しました。私は、目の視野が狭く、このため自動車免許をとれないので、妻が運転免許をとって

います。

平成十二年の喜寿を期に、子供達は異種の職業のため、測量業の跡継ぎが出来ず、四代続いた測量業も同業社や周囲の方々から惜しまれましたが廃業することにしました。

妻も社員でしたので、現在、二人の厚生年金で細々と生活しながら、健康のため林業のボランティア活動をしております。

早稲田大学学長の大隈重信翁の百二十五歳まで健康で生きる、何でもできる精神を持って、これに応えるため努力出来たのは前にも申し述べましたが、軍隊生活中に先輩並びに中国人を含め周囲の方々から受けた教訓によるもので感謝しお礼申し上げます。

## 一昼夜・麦畑に伏せ

神奈川県 荻窪 藤作

私は、黒潮や親潮の荒れる太平洋も、房総の浜、近くは三浦半島に守られ、穏やかな東京湾に面した港町横浜に隣接した町「大和」に生まれ、幼児の頃から近隣の古老の語り部の話を聞いて成人しました。「日本国は相模の大和がはじまりだ」、奈良地方も「大和」だが俺達の「大和」が本家本元、日本発祥の地だと自己主張の強い古老がいました。私もその薫陶を受けました。西を望めば日本一の富士の山があり、地元には流れ清き相模川、境川など格好の水遊びや水練の場がありました。至極風光明媚な地方でした。もちろん人々も豊かでしたが、昔の関東武者的要素も多分に内蔵してました。近隣の童でも、自家の倅も同一で、不正は叱責し、鞭打ち、正しいものには満腔の思いで賞したものでした。